

## 研究発表

### 幸田露伴の外国を見る眼

—露伴文学解読のひとつの試み—

Kōda Rohan's vision of the West:  
One interpretation of Rohan's literature.

瀧 沼 誠 二\*

Kōda Rohan occupies a unique place in the history of modern (kindai) Japanese literature. In an age when many writers were influenced by Western culture, Rohan created a literature which both thematically and stylistically has its roots in the Eastern tradition.

However, despite this, it must not be overlooked that Rohan entertained an enormous interest in the West. His very early novel, *Ro dan-dan*, published Meiji 22 (1889), is cosmopolitan in scope, being set in New York City. In *Fūryū butsu*, too, which was published in the same year, one can detect a keen awareness of the West.

Rohan's vision of the West, as presented in these works, is very unique. Its underlying elements will be ascertained through analysis of the poet Tairakku in *Ro dan-dan*. It will also be shown that Rohan's experiences in Hokkaido, which amounted

---

\* 瀧沼誠二 北海道教育大学教授

to an overseas sojourn of a very singular kind, can in fact be compared to a “Western experience,” and *Yuki fun-pun* is analysed according to this interpretation.

Lastly, it will be shown through detailed analysis of *Fūryū butsu* that the accounts of the Mormon Church in this work are part of the story’s thematic structure.

一、

幸田露伴を所謂「理想派」と呼び、その文学作品を評するに「理想主義」をもってする方法は、既に定着して久しい。しかし、こうした包括的評言による露伴文学の文学史への位置づけに対し、研究の立ち遅れを指摘する声もまたある。<sup>(註1)</sup>

登尾豊氏は、近代文学史における露伴観の推移に触れ、尾崎紅葉の写実、幸田露伴の理想という図式による手際のよい整理の蔭に、実は〈理想という容器に盛られている理想の内容は何ら問われていない〉状況があることを指摘しておられる。<sup>(註2)</sup>

氏の言われる理想という容器に関する視点について考えるとき、ただちに想起できるのは、反近代という視点である。露伴文学の再評価は、近年とみにこの視点からおこなわれている。反近代というコトバ自体は、三好行雄氏が言い出したものであり、しばらくの間概念規定に不分明さがつきまっていたが、後に氏は、〈文明開化にはじまる近代化に対して同調しなかった、あるいは批判的だった作家、ないし文学〉と規定された。<sup>(註3)</sup> しかしながら、これでもなお、作家幸田露伴とその作品が規定しようとする、いわゆる反近代の領域は、なお明らかにはされていない。上掲のごとき性格を日本の近代思想の範疇においては、たとえば、近代日本における反近代を考える手掛り<sup>(註5)</sup> (傍点論者) として国粹主義に結びつけて考えるという現実すらある。柳田泉氏

は、

「東洋的な思想、ないしは国粹主義とも言ってもよいでしょうが、——ただ国粹主義という非常に広く解釈しないと工合が悪いんですが、——そういうものにつながるころがあることははっきりします。けれども、いま申し上げたように国粹主義といいますと、そのままでは露伴の態度が、もう少しあとで出てきましたいわゆる「日本人」一派の国粹主義と、ちょっと合わないところがある。」<sup>(註6)</sup>

と述べておられるが、幸田露伴を反近代という批評の基軸で捉えようとする危うさを鋭く指摘しているといえよう。

再び問おう。あの理想という容器を、幸田露伴はどのように入手し、その中にいったい何を入れたのかと。

こうした問いかけは、露伴における東洋と西洋の関わりを、1つの考究の対象として浮き彫りにせずにはおかない。ところが、これまでのこの主題についての考察は、しばしば恣意的でありすぎたのではないかと思うのである。もう少し具体的に、この恣意性を述べてみよう。幸田露伴と西洋との関わりについては、ほぼ3つの論に分かれているように思われる。

1. 積極的関与説
2. 消極的関与説
3. 否定的関与説

私は、こうして私なりに上記のごとく分類してみた。

1については笹淵友一氏の論をあげることができよう。氏は幸田露伴に関する諸論において、露伴の『明暗ふたおもて』（『国会』28・1）における「15で蠡斯と蜜を食ってゐた男の真似がしたく」という記述、また北海道後志国余市で電信技手をしていた彼が、東京に逃げて帰る途次の明治20年9月25日、仙台において日曜礼拝に出席して説教を聞いた（『突貫紀行』）とか、東京に帰って見たら、幸田家は家族全部が植村正久の感化の下にキリスト教信者になっていたとか、随筆『方陣秘説』や処女作『露伴々』においては特にユニ

テリアニズムに関心があったとかいう点から、キリスト教という、いつてみれば日本における1つの牢固な近代と、深い、積極的な関わりを認めようとしておられるのである。<sup>(註7)</sup>

2については、柳田泉氏を挙げなければならないだろう。氏は、幸田露伴が現在の青山学院の前身東京英学校に通学し、相応の語学力があった事実を重視しながら

「露伴は、東洋的日本的なものを土台とするが、じつは西洋排斥ということ、そう強く主張しておらないのです。西洋も必要だと考えている。それならなぜ東洋思想、あるいは東洋文学だけに固まったかということ……〈中略〉……新しい日本を建設するためには、理想としては、東洋と西洋とを打って一丸としなければいかんということ自分で考えた。そこで、もちろんそれまでは主として東洋の文学を勉強したから、今度は西洋のことを大いに勉強しようと考えた。<sup>(註8)</sup>」

〈新しい日本を建設するために〉という目的のために〈東洋的日本的なものを土台とするが〉西洋にも関心をもつという、いわば消極的な関与である。

3については、川村二郎氏の次のような見解をあげてみたい。

「新文明についての該博な知識に恵まれていたわけでもない。教養の基盤は九分九厘まで東洋文化の遺産であり、新文明との接触は、電信修技校での学習といった文字通り技術の領分に限られている。<sup>(註9)</sup>」

このような氏の見方からすれば、〈露伴は、近代を超えるどころか、むしろ近代以前にとどまっていた<sup>(註10)</sup>〉という結論が導き出されるのは自明のことである。

きわめて大雑把な分類ではあるが、改めて既存の幸田露伴論を取り上げてみると、新しい批評の磁場と考えられていた反近代という視座からさえ、今なお彼は実質的には論じられていなかったということが理解されよう。

本論はもちろん、幸田露伴における東洋と西洋の関わりなどという大きなテーマを論ずるものではない。むしろ先に紹介したような露伴における東洋と西洋の関わりを論じた諸論に欠落しているひとつの視点を提示してみたい



のである。近代にせよ、反近代にせよ、幸田露伴がどんな仕方で、どのように外国を見ていたのかという、ごく小さな部分を剔り取って、いささか露伴文学解説の手だてに供しようとするものである。

#### 注

- 1 平岡敏夫『明治文学史の周辺』（有精堂出版）150頁
- 2 三好行雄・竹盛天雄編『近代文学2』（有斐閣双書）57頁
- 3 「国文学解釈と鑑賞」（昭和35年1月号）
- 4 『日本の近代文学』（日本放送出版協会）
- 5 久野昭『近代日本と反近代』（以文社）92頁
- 6 『座談会近代日本文学史』（筑摩書房）82頁
- 7 笹淵友一『浪漫主義文学の誕生』（明治書院）等を参照
- 8 6と同じ
- 9 『近代小説の読み方(1)』（有斐閣新書）4頁
- 10 9と同じ

#### 二、

幸田露伴の処女作は、『露団々』（『都の花』明治22・2～8）である。貧より身を起し巨富を得たぶんせいむが、愛嬢るびなのために婿選びをする物語である。

ぶんせいむはユニテリアンである。この点について笹淵友一氏は、次のように述べておられる。

「『露団々』の中心になっている主題はニューヨークの富豪ブンセイムの娘ルビナとその愛人シンジアとの恋愛であるが、ルビナはユニテリアンであり、シンジアは第二のムーディと評されている説教家で、世道人心の教化に当たっているが、その思想から推してもユニテリアンだと考えられる。『露団々』の重要な主題はこの模範的なキリスト者男女の「神聖の恋」にある。更にその神聖の理由は恋の花は「信用の地に咲く」ということにある。ここに露伴独自の恋愛神聖の観念があるが、『露団々』の構想はこの観念によって成り立っており、そこに露伴におけるキリスト教

の影響がある。<sup>(註1)</sup>」

こうした見方に対し、私自身否定的にならざるをえない。特にシンジヤをユニテリアンと推測するのは、無理がある。彼の説教も特にユニテリアンらしいものではない。また、『露団々』第4回には、〈父母共に世を去りしが、ぼすとん大学に入りて神学を修め〉とあるところから、無宗派の経営をしているとは言え“Convention of New England friends”を歴史的母体としてメソジスト派によって設立された大学なので、どうもユニテリアンと安易に結びつかないのである。

キリスト教を作品の内実として、その思想性を重視する作品というより、むしろ〈日本に紹介されたばかりのユニテリアンという宗派を用いて<sup>(註2)</sup>作品を構成したものであり、〈日本にユニテリアンを紹介したのは矢野竜溪で、郵便報知新聞の明治19年と翌年に合計18回にわたる文章を掲げた。露伴ははなはだ早くそれを採り入れたのである<sup>(註3)</sup>〉とする論は、首肯すべきであろう。

というのは、後に論じるが露伴の外国を見るその仕方には多分にこうした傾向があるからである。

先に述べたように富豪ぶんせいむが、娘るびなの婿選びのために新聞広告をする。申込人が殺到するが、その中に田亢龍なる中国人の人物（実は日本人吟蛸子に身代り受験させる）がいる。彼が作中に登場する場面は、次のように叙述されている。

「小僮走り来りて、「電報がまりました」と、渡すを取てひらき見れば、「世界の中に尤も愉快の生活を為すものは予なる故に、予は貴下の令嬢の好配偶たらざるべからずと考へて来れり 貴下も喜んで待たるべし 来月五日までには充分到着すべし ざる<sup>・</sup>とれ<sup>・</sup>き<sup>・</sup>し<sup>・</sup>て<sup>・</sup>い<sup>・</sup>の<sup>・</sup>停<sup>・</sup>車<sup>・</sup>場<sup>・</sup>に<sup>・</sup>て<sup>・</sup>でん<sup>・</sup>こう<sup>・</sup>りょう<sup>・</sup>より<sup>・</sup>ぶん<sup>・</sup>せい<sup>・</sup>む<sup>・</sup>君<sup>・</sup>」

アメリカの大都市を中心として展開される富豪の婿選びの物語は、〈当国の人が一番多く、次で佛蘭西英吉利独乙伊太利などで、国の総計は十七個国〉（『露団々』第12回）によって今やまさに火蓋が切られようとするときに、アメリ

カ西部の辺境の町の名前が突如出されるのである。

田亢龍は、〈支那の大都、南京に〉(『露団々』第9回)住んでいるので、太平洋を船で渡って、その身代りの吟蝸子がサンフランシスコあたりに着いたのは、当然想像される場所である。しかし、幸田露伴は、いい加減に現在のソルトレークシティを持ってきて、そこから電報を打たせたのだろうか。ソルトレークシティは、現在は鉄道も衰微しているが、かつては、6つの鉄道路線の合流地点であり、『露団々』の背景となる年代においても、(1) the Union Pacific と(2) the Western Pacific の2線が合流していた。この地をしたがって“Crossroad of the West”と呼んでいるのである。処女作『露団々』には、この作品が構成される際の作家露伴の〈外国〉に関わる態度が秘められている。〈さるとれきしてい〉なる1語からどんな創作秘密が露呈されるのだろうか。あくまでも、こんな小さな部分になおこだわってみることとする。

#### 注

- 1 『近代日本キリスト教文学全集Ⅰ』(教文館)251頁
- 2 塩谷賛『幸田露伴上』(中公文庫)64頁
- 3 2と同じ

#### 三、

幸田露伴が、明治22年9月に、吉岡書籍店の「新著百種」第五として公けにした『風流伝』は、幸田露伴の出世作である。その刊行は、『露団々』と同じく明治22年なので、この二作は、幸田露伴の最初期の作品として同時に見据えて考究してよいだろう。

この作品に対する批評を次にひとりひとり見てみよう。古くは石橋忍月が、

「言文一致躰にあらざれば真状实景の機微を穿つ能はずと言ふ者あらば吾人はさしづめ風流伝の近例を取って其妄を駁せん<sup>(註1)</sup>と欲す。」

と述べた。近年においては、平岡敏夫氏が

「題材だけではなく、その主題自体が反欧化主義なのであり、欧化主義

の現実に対する露伴の発想・姿勢が文体を決定している。<sup>(註2)</sup>

と述べ、さらに『風流仏』の主人公珠運に関して、

「一般の書生とは異なる仏像彫刻師であり、修業の旅の途中、木曾須原の宿で花漬売りの少女お辰とめぐりあう。若い男女を主人公とする点では世に流行の人情世態小説と同様に見えるが、風流仏成就に向かってひたすら刻苦してゆく珠運の気魄は、当時の小説の主人公たちにたえてなかったところで、欧化主義的状况をつらぬき破る理想主義がうかがわれる。<sup>(註3)</sup>」

とも述べておられる。まず石橋忍月評については、まったくその通りであろう。それは、『風流仏』第6「如是縁」の中「実生二葉は土塊を抽く」において、珠運がお辰に心を魅かれていく場面で、

「我もお辰と会話仕度なつて心なく一間許り戻りしを、愚なりと悟つて半町歩めば、我しらず迷に三間もどり、十足あるけば四足戻りて、果は片足進みて片足戻る程のおかしさ、自分ながら訳も分らず、名物栗の強飯売家の牀几に腰打掛てまづまづと案じ始めけるが、箒木は山の中にも胸の中にも有無分明に定まらず、此処は言文一致家に頼みまし。」

と描写している。〈近代日本人〉を〈近代口語文体〉で表現しようとする言文一致に対する作家露伴の挑戦的態度がうかがわれる。

さて次に、あの反近代<sup>・</sup>というコトバが〈反欧化主義〉とか〈欧化主義的状况をつらぬき破る理想主義〉といういわば三好氏とほぼ同一のコードで『風流仏』を解説しようとする試みについてである。この点についての当否を問題にするというより、再び幸田露伴の外国を見る見方を、具体的に提示してみたい。

『風流仏』の団円「諸法実相」の最後に次のような表現がある。

「若又過つてマホメツト宗モルモン宗なぞの木偶土像などに近づく時は、現当二世の御罰あらたかにして、光輪を火輪となし一家をも魂魄をも焼き滅し玉ふとかや。」

マホメット宗は、イスラム教としての世界宗教の地位を占めてはいるが、モルモン宗はそうではない。いったい幸田露伴は、モルモン宗という外国を、どのように入手したのだろうか。またなぜ？

“Journal of the Japan Mission”<sup>(註4)</sup>によればモルモン宗の宣教師ヒーバー J・グラント、ホーレス S・エンザイン、ロイス A・ケルシ、アルマ O・テラーの4人が、エンプレス・オブ・インデア号で東京湾に着いたのは、明治34(1901)年のことである。現地ソルトレークシティの新聞“Deseret News”(1901年4月13日付)は、次のように報じている。

#### ARRIVE AT YOKOHAMA

Apostle Grant and Companions Now in the Mikado's Empire.

President Snow received a cablegram today from Apostle Heber J. Grant announcing that he and his companions arrived safely at Yokohama last midnight. The cablegram merely stated the fact, giving no farther particulars but those who are familiar with his plans say that Apostle Grant will first call on the highest government officials including the mikado himself, and will lose no time in getting the work started in Japan.

モルモン宗の宣教師は、この記事から明らかのように、明治34年8月12日に日本の横浜に上陸しているのであるから、『風流伝』はその12年前に書かれたことになる。いったい露伴はどこからモルモン宗の情報を得て、どうして『風流伝』においてそれを用いたのだろうか。これからモルモン宗が、幸田露伴のもとに辿り着くまでの経路を調べてみよう。

宣教師達が上陸して、先ず最初に日本人に触れたのは新聞関係者である。以下、宣教師達が保存している名刺とその書き込みから列举してみよう。

明治34年8月13日

時事新報社 大西理平 横浜グランドホテルにて

明治34年8月14日

二六新報社外客訪問主任 岡野英太郎 横浜グランドホテルにて

明治34年 8月24日

社会新報 山崎丑之輔 横浜ブラクにて

明治34年10月11日

報知新聞社 福良虎雄 横浜ブラクにて

明治34年10月29日

独立新聞主筆 中川朝三郎 メトロポールホテルにて

以上である。特に二六新報社の岡野英太郎については、次のような記述が残されている。<sup>(註5)</sup>

August 16, 1901

Dr. A. Taro Okano, representing the Niroku Shinpo, a prominent newspaper published in Tokyo, called and asked for an interview, which was granted.

このように日本側報道機関の対応は、異常なまでに迅速である。宣教師が上陸した翌日または翌々日には、取材活動をはじめているのである。いったいモルモン宗の宣教師達のもとへ、報道陣を駆りたてたものは何だったのだろうか。この点についてさらに考察するためには、明治時代初期の新聞記事が役立つ。

壬申（明治5年）2月の「京都新聞」に、次のような記事が掲載されている。

「〈前略〉全権大使モ旧臘初七桑港<sup>サンフランシスコ</sup>へ到着ノ処此地ノ人民殊<sup>ネンコロニモテナ</sup>ノ外懇遇イシタシ候ニ付案外長滞留イタサレ申候。桑港<sup>モテナシ</sup>ノ待遇ニハ数万金ヲ費セシト云事ナリ。米政府ニテ此度ノ使節ヲ稀ナル国客ト見候故華盛頓<sup>ツイヤ</sup>滞在ノ入費トシテ五萬金ヲ募リ議院ニ下シ論議ノ上既ニ一決イタシ候由。「サテ<sup>ヤ</sup>漸<sup>ウツク</sup>二十二日此地発軛イタシ候処鉄路雪ノ為ニ埋没桑港ヨリ九百餘里ソールトレキト申ス処ニ全権公使ト共ニ今以テ滞在終ニ此処ニテ越年仕候。今年ノ如キ大雪ハ此鉄路創築以来未曾有ト申ス事ニ御坐候。〈中略〉西曆

千八百四十六年<sup>即我弘化三年丙午ナリ</sup>モルモン宗ト申ス一派ノ宗旨合衆国ノ方ヨリ  
 逐レ終ニ此処ニ来テ居住セシト云。千八百四十七年<sup>墨期斯古ノ</sup>戦争ニテ  
 又合衆国ノ管轄<sup>シハイ</sup>ニ入レリ。最初モルモンノ徒百四十三人千三十餘里人跡  
 ノ絶タル所ヲ経テ此地ニ来リ當時ハ二萬餘ノ人口アリ。尤三分ノ一ハ他  
 宗ノ者ナリ。此モルモンノ和尚ヲハプレシテントト唱ヘ<sup>イキオイ</sup>甚威權有之申候。  
 此宗ノ奇ナルハ一夫<sup>ヒトリ</sup>ニシテ多妻ヲ娶リ既ニ和尚<sup>ト云</sup>ヲ<sup>フク</sup>ナドハ十九人ノ妻  
 アリ。生子七十餘人<sup>ウメルコトモ</sup>生存スル者<sup>イキテオルモノ</sup>四十八人寺堂ハ高大ニシテ中ニ萬餘人ヲ  
 容ル<sup>イ</sup>ヘシ。耶蘇派ナレトモ此ノ如キ一派ヲ立テ神ヨリ直ニ<sup>シキ</sup>教導<sup>ヲシヘ</sup>ヲ授クル  
 ト云フ文明ノ国ニテモ今日此ノ如キ宗派ノ開ケ人民モ亦真ニ信用イタス  
 杯ト申ハ実ニ不思議ナル事ト相考申候。尤華盛頓政府ニテハ甚此宗ヲ厭  
 ヒシガ此国元来<sup>クニノオキテ</sup>國憲ニ宗旨ハ人民ノ信向ニ任セ有之候故別ニ如何トモ致  
 シ難キ由]

長々と引用したが、岩倉具視卿を特命全権大使とする米欧使節団が、ソルト  
 レークシティで大雪のため足留めをくった出来事について報ずる〈某氏米国  
 ソールトレキヨリ当地某氏へ来状ノ写〉なる文献が「京都新聞」に掲載され  
 たのである。地方の新聞だけでなく、この2週間にもわたるソルトレーク滞  
 留は、東京のあるいは横浜の新聞が報じていたのである。このアメリカ合衆  
 国の辺境の一宗派の存在は一夫多妻の事実とともに、というよりは一夫多妻  
 のゆえに、日本人の関心をそそったにちがいない。

このような関心が、明治8（1875）年に、チャールズW・レゼンドルが大  
 隈重信公宛に進言した「モルモン教徒を蝦夷地開拓民」と用いるようにとの  
 建白書に連なっていく。この内容には、教義、教会の歴史、教会の教勢、土  
 地財産目録などが詳述されている。

The inhabitants of Utah now find themselves surrounded with so  
 much uncertainty and danger brought about by the opposition made  
 to the maintenance of their social organization within the limits of

the United States, that today not only is the influx of European-immigration there stopped, but even those who have been long established in the district are beginning to look for the day when they will have to move to more hospitable stores. There is nothing in the causes of this hostility towards the people of Utah calculated to gain the sympathy of Japan and make her dread their presence in Yesso should they seek privilege to transfer their abades there. It is owing entirely to prejudices with which this country has nothing in common. Besides this, as colonists the inhabitants of Utah have proved superior to any other class known. They form a community, numbering over 50,000 souls, called Mormons, and follow a peculiar religion called Mormonism, from which they derive their name.

岩倉具視公の欧米使節団は、近代日本にとっては、まさに歴史的な出来事であり、その動向は当時の日本人の耳目をそばだてたといつてよいだろう。そして幸田露伴も、この出来事を放置してはおかなかった。それはただ単に「モルモン宗」という名称を作品に用いたにとどまらない。実は欧米使節団を意識して『風流仏』は構想されているのである。

『風流仏』のお辰の父親は、新徴組くずれの〈梅岡何某と呼ばれし中国浪人〉である。お辰を身ごもった母親室香を捨てて、鳥羽伏見の戦争の官軍に加わるが、20年ぶりにお辰の前に姿を現わす。この梅岡某の人生の軌跡をみてみよう。

「功名の一トつあらわれニツあらはれて、総督の御覚えめでたく追々の出世、一方の指揮となれば其任愈重く必死に勤めけるが、仕合に弾丸をも受けず皆々凱陣の暁、其方器量学問見所あり、何某大使に従つて外国に行き何々の制度能々取調べ帰朝せば重く挙用らるべしとの事 室香に約束は違へど大丈夫青雲の志此時伸べしと、殊に血気の雀躍して喜び、米国より欧州に前後七年の長逗留、〈中略〉岩沼卿と呼せらるゝ尊き御身



分の御方、是も御用にて欧州に御滞在中、数ならぬ我を見たて御家なき家の跡目に坐れとのあり難き仰せ、再三辞みたれど許されねば辞兼て承引し、共々嬉しく帰朝」

梅岡はこうして〈岩沼卿と呼せらるゝ尊き御身分〉のところへ養子としておさまるのである。

〈岩沼卿〉と〈モルモン宗〉という二つのコトバは、幸田露伴が入手した〈外国〉の情報源が何であったのかを、今は躊躇なく言いあててを可能にしている。すなわち岩倉卿の遣外使節団の動向を綴った久米邦武の手になる『特命全権大使米欧回覧実記』がそれである。この書は既に文庫本となっているが、今内閣文庫蔵の請求番号290/29518/88の原本を見ると、太政官記録掛蔵「8317」とする5冊本であり、表紙には「<sup>特命全権大使</sup>米欧回覧実記」、明治11年10月刊行とある。これには、次のような記述がある。少し長いが引用してみよう。

「[モルモン]宗ハ耶蘇教ヨリ分レタル一種ノ異教ニテ、西洋人ハ以テ邪宗ト擯斥スル教タリ 其教旨タル、一夫七婦ヲ娶ル以上ニ非レハ、天堂ニ上ルヲ得スト謂フ宗ニシテ、此宗ヲ始テ唱ヘ起セルハ、当国「ヴェルモント」州ノ人「ヂョウゼフスミット」ナルモノ、林中ニテ神人ニアヒ、其告ニテ經文一卷ヲ石室中ニ得タリト称シ、此宗ヲ唱ヘ起セシニ後暗殺ニ逢ヒ、其姪ニ「ハルガミヤン、ヨング」ナル者アリ <sup>ニューヨーク</sup>新約克州ノ人ナリシカ 三十二歳ニテ妻ヲ失ヒ 是ヨリ意ヲ学問ニ傾ケ 其後英国ニ遊ヒ 「モルモン」ノ奥義ヲ研シ出シ 帰テ後ニ其教ヲ主張シケレハ <sup>ニューヨーク</sup>新約克ノ人ヨリ放逐セラレ 一党百四十三人ト共ニ 此山奥ニ竄匿シテ、遂ニ此府ヲ開キ起スニ至レリ 是一千八百四十七年ノ事ニテ 今ヲ距ル二十三年ノ前ナリ 「ヨング」氏当年七十一歳ニテ猶健存ス 妻十六人子四十八人アリ 家産巨萬ヲ累ネ 其邸宅ハ府ノ東北ナル山嶺ニアリ 街ニ跨リ地域ヲシメ 儼トシテ城郭ノ如ク 勢ハ封侯ニ比ス 宅地内ニ「ヂョルダル」河ノ支流ヲ引テ 紡織場ヲ起シ 水輪ニテ機ヲ運シ 羅

紗ヲ織ル事日ニ三百「ヤールト」ノ長キニ及フ「ユタ」部ニ羊毛ヲ出ス  
十萬「ポント」スヘテ此人ノ製造料ニ供スルナリ 又「ユタセントラル  
会社」ノ鑛道モ 此人ノ私社ニカ、ル 此「モルモン」教ハ「ユタ」部  
ヨリ「ネヴァタ」<sup>ニューメキシコ</sup>新墨是科部ニ流布シ 信教ノ徒二十萬人ニ及ヒ 延テ  
加利福<sup>カリフォルニア</sup>州ニモ 浸滌セントスル勢ナリケレハ 米<sup>米</sup>国ノ人 ミナ之ヲ憎  
ミ 本年大政府ノ議決ニテ 其宣教ヲ禁止セント 教師ヲ呼出シ 議院  
ニテ論辨セシニ辞屈セリ」

この書を著した久米邦武は、田中彰<sup>(ほ6)</sup>氏によれば、太政官少書記官として編修したもので、出自は佐賀藩、藩校弘道館に学び、明治12年には修史館の一員となり、修史館が帝国大学に移管されると同時に、すなわち明治21年に文科大学の教授となっている。明治24年『史学会雑誌』に発表された「神道は祭天の古俗」なる論文が、国体に対する不敬の言辞にあたるとして攻撃され、大学から追放されていると言う。歴史家久米は、モルモン宗に関しては、かなりの事実誤認をしているが、外国において惹起された興味や関心を、それぞれの対象に即して、きわめて微細に描写している。それがまた純度の高い、客観的な啓蒙主義に貫かれている点において、幸田露伴を魅了したにちがいない。

しかしながら、われわれは次の点に改めて気づかされる。『露団々』は、ニューヨークを舞台にしてはいるが、森鷗外の『舞姫』や夏目漱石の『倫敦塔』の如き臨場感はない。なぜだろうか。露伴は外遊体験をしていないから——という直接的な答えが用意されるかもしれない。幸田露伴は書物による外国体験しかなしえなかったからともいえよう。これらは、言わずもがなの事実である。しかし、そうではあっても、幸田露伴は〈外国〉に対しては敏感な反応を示し、しかも外国のインフォメーションを創作の主要な契機にしてさえいるのは既に述べた通りである。

こうした彼の〈外国〉に対する態度は、やはりあの近代とか反近代論の当否を論ずるためにも、仔細な考察の対象にすべきなのである。『露団々』にし

でも『風流伝』にしても、そこには『米欧回覧実記』なる1書が関わっていたことを明らかにした。たしかにそれは書物によって入手した外国でしかない。しかし、その入手の仕方には実は露伴らしきがあることは注目してよい。

注

- 1 『国民之友』(明治22年10月号)
- 2 1節の注1と同じ
- 3 同上
- 4 Historical Department, The Church of Jesus Christ of Latter-Day Saints in Salt Lake City Index No. CR/4185/61/BX-1
- 5 同上
- 6 田中彰『岩倉使節団』(講談社現代新書)

四、

『露団々』の〈外国〉は、先にあげた『米欧回覧実記』と矢野龍溪の「郵便報知新聞」掲載のユニテリアン教会に関する記述から獲得したものであり、『風流伝』の〈外国〉は『米欧回覧実記』に依拠しているとすれば、幸田露伴の主たる〈外国〉は、主にキリスト教に関するものと言ってよいだろう。そしてこれに対処する仕方にも露伴らしきうかがわれるのは興味深い。それは、明治のキリスト教の主流を占めるプロテスタンティズムではない。明治初期に若い文学者の精神を捉えたプロテスタント・キリスト教ではなく、むしろキリスト教界における異端、つまりカトリックからもプロテスタントからも圧迫されている〈ユニテリアン〉や〈モルモン宗〉に、幸田露伴は彼の眼を向けている。ユニテリアンもモルモンも、伝統的な三位一体論を否定する。ユニテリアンは、キリストの神性を否定し、モルモンは、キリストの西半球来訪説を基盤とする『モルモン経』を聖典として認める立場をとっている。幸田露伴はこうした、いわばキリスト教界の〈辺境〉に位置する宗派に眼を向けているのである。

笹淵友一氏が称揚する『露団々』のキリスト教的「神聖の恋」説の一つの

論拠となっている『突貫紀行』（明治20年9月25日）の仙台市における日曜礼拝も、よく読んでみると、幸田露伴の宗教に対するあるくせが伺い知れるていものなのである。

二十五日 朝、基督教会堂に行きて説教を聞く。

このような記述は、やはり笹淵氏をして一つの論拠の引用へと誘引させたのであろう。しかし、この文の次には、

仏教も此教も人の口より聞けば有難からずと思ひぬ。

と、きわめて醒めた心懷を吐露しているのである。キリスト教だけではなく仏教もそうであるが、これらを見る露伴の眼は、実に醒めている。

こうした露伴の眼ざしを明らかにするために、再び『露団々』に立ちかえってみよう。ここには、諸外国の首都をはじめ主要な大都市の名前がいくつか出てくる。しかし日本の首都東京はおろか他の都市もあげられておらず、わずかに辺境〈エゾ〉地の地名〈積丹<sup>シヤコタン</sup>〉が登場するだけである。この地名を単にあげるにとどまらない。『露団々』の第16回「白露をこぼさぬ萩のうねりかな」に、婿候補として、いわば第1次予選ともいうべき作文に合格しながらも第2次の面接試験に姿を現わさない人物、詩人たいらつくが登場する。この詩人に関して、まずぶんせいむとその愛嬢るびなどの間に、次のような会話が交される。

ぶん「驚くなよ、……………夫から四十枚計り書た人があるが、」

るび「それはなんと云ひました。」

ぶん「是れは貴様にも面白いよ、全篇残らず古代の話しにして作つた詩だよ。」

るび「それは定めし面白う御座りませう、少し御話しなすつて下さいませんか。」

ぶん「あッはッは、詩と聞くと直に顔色を直すからいゝ。……一体の脚色は小人讒者が跋扈して人民が非常に苦しむ中に、世を憂る君子と淑女が種々の辛酸をなめ盡し漸く国も太平になり、婚姻の式を挙るとたん

夷狄が国境に攻めて来たので、夫は直に兵を率ゐて戦争に出たが運わるく戦死したので、妻は遂に焦れ悲しんで盲目になりて迷ひ歩行き、積丹シヤコタンという小高い山の雪中で凍え死ぬるといふ、実に凄い話だ。」

にゆうよるくふを舞台とする『露団々』に、北海道後志国余市の地名が、突如として出てくるといふ奇異さは、しかしながら後に明治22年11月25日から読売新聞に掲載された『雪粉々』の世に出てくることを予想する。しかし、『雪粉々』引に、〈明治二十一年露団々の一篇の稿を了るや予はまた直に一部の長々しき物語の案を立てたりき。此雪粉々の一篇は当時の案のおもかげなり〉とし、その根底に〈あやしきことも有るものなり。一昨年のある夜の夢に、積丹の山の姿をいと明らかに打眺めて、あれこそは往昔美しき女の泣きて泣きて生命絶えしところよなど、夢心地に深くもあはれに覚えけるが、醒めて後之を思へば、積丹の山にて美しき女の身を終はりしといふことは、真実にさる事ありしにはあらで、此物語を案ぜし折に想ひ得たりし最後の一章の光景なりしを、吾が夢の中にて我が往昔造り設けしことなりとも心づかず、真実にありしことのやう覚えて悲しく思ひたりしなりけり〉と書かざるを得なかつた、露伴の若き時代の〈辺境〉体験が牢固として存在する。主流よりも傍流を、中央よりも辺境を選びとって行く幸田露伴は、それを彼の文学的態度ともしてしまつたのではなかつたか。あの露伴らしきとは、こうした事実を言うのである。

ここまで論じ来たつた以上、残された課題は、そんなに漠とはしていない。ただ〈辺境〉であの眼ざしを決定的にしたものは、いったい何であつたのかを述べるのみである。

しかしながら、それについては別の機会に譲るべきであろう。ただ、次の点だけはかいつまんで述べておきたい。余市在住期に『楞嚴經』を学んでゐたことが、〈偶成〉なる律詩の一節〈醒時氣白楞嚴經〉や、『般若心経第二義注』の〈我も一年ばかり湯氣にあがりて、人跡なき深山の笹小屋に徹夜の坐禅など役だたぬ業を悦び、酒の肴に楞嚴經を読む〉などの記述によってわか

る。この経の正式名は『首楞嚴三昧経』と言ひ、「首楞嚴」とは〈シューラン  
ガマ (súramgama) という原語の音訳<sup>(註1)</sup>〉であり、その意味するところは〈「勇  
者として進み行く者」<sup>(註2)</sup>〉であるという。この經典の87節から〈魔界行不汚菩薩〉  
が登場し、いわゆる魔の世界が顕示される。幸田露伴が、この魔というコト  
バを用いるのは、上掲した『般若心経第二義注』の深山における坐禅体験や  
楞嚴経を読んだことを吐露する文のすぐ後である。〈魔を斬らむとする〉とい  
う露伴の生き方—それは小説家露伴の創作原理でもあるのだ—を表明する。  
そしてまた次のようにも述べている。あの『楞嚴経』の影響であろうか。〈自  
ら大英雄と気がついて、〈天の大導師たらんと心付かば論なし〉と含羞の情を  
こめながらも、〈耶蘇教にても仏教にても湯気にあがりたる人は多〉い中で、  
〈幸にして利劍を手中に把り得るときんば直ちに乱麻を斬つて捨て〉ようと  
するのである。幸田露伴が、〈モルモン宗〉に関心を抱いたのは、一夫多妻と  
いう教義が魔に見えたからでもあろう。彼の外国を見る眼は、こうした魔と  
いう言わば近代社会における〈辺境〉としての sub-culture とあの『楞嚴経』  
に言うところの〈魔の領域にある真如と、仏陀の領域にある真如とは、不二  
である〉<sup>(註3)</sup>という姿勢に支えられたものであったにちがいないのである。この  
姿勢は、〈辺境〉なるエゾに赴かざるを得なかった、若き露伴の外遊体験にこ  
そ求められるべきものであった。

#### 注

- 1 長尾雅人・丹治昭義『維摩経・首楞嚴三昧経』（中央公論社）425頁
- 2 同上
- 3 同上書302頁

#### 討議要旨

メラノヴィッツ氏より、露伴のモルモン教への関心は、外面的なエキゾチ  
ズムか或は内面的思想的なものであったか、との質問があり、発表者より、

『風流仏』に於ける珠運が仏像を彫ることによりお辰との愛を完成してゆくのは、非キリスト教的であるが、露伴はマホメット教やモルモン教の木偶土像といっているのでと内面的にかかわっていたのではないかとの発言があった。